

菌種同定検査途上で発覚した 1 次鑑別により誘発された菌種推定誤認事例

◎藤田 朋浩¹⁾、廣瀬 米志¹⁾、高橋 孝²⁾

学校法人北里研究所 北里大学メディカルセンター¹⁾、北里大学大学院感染制御科学府感染症学研究室²⁾

【はじめに】近年菌種同定技術の飛躍的進歩により、本邦においても質量分析や遺伝子解析による菌種同定への移行途上にあるが、未だ多くの施設において生化学的性状等による同定法が行われている。今回我々は菌種推定において 1 次鑑別結果による、推定菌種を誤認した事例を 2 例経験したので注意喚起を目的とした事例の報告をする。

【事例 1】同定菌種は *Saprochaete capitata* であった。35℃ 72 時間好気培養後の CHROMagar candida 色調により、*Candida parapsilosis* と推定したが、25℃ 72 時間培養後同培地形成されたコロニー性状およびグラム染色性、api20C AUX 同定コードを総合的に判断し *S. capitata* と同定した。

【事例 2】同定菌種は *Granulicatella adiacens* であった。血液培養嫌気ボトルより分離培養時、35℃ 好気培養において非発育、嫌気性菌と判断し *Gemella morbillorum* と判定したが、24/48 時間衛星現象の発育変化を認めず、PYR 試験陽性を総合的に判断し *G. adiacens* と同定した。

【細菌学的所見】事例 1： *S. capitata* におけるコロニーのグラム染色像は、35℃ 培養時酵母型菌、25℃ 培養時分節型分生

子を形成し、CHROMagar candida での発育はやや遅く、25℃ 培養において気中菌糸形成を確認し得た。api20C AUX による菌種推定が可能であった。

事例 2： *G. adiacens* における衛星現象は、24 時間 48 時間で発育に変化がなく、PYR 試験が陽性であり、api20Strep により本菌と同定し得た。

【考察】今回経験した 2 事例は、1 次鑑別による菌種推定の誤認により、誤った同定プロセスによる誤同定が誘発される可能性を示唆する事例であると考ええる。

【まとめ】我々が経験した事例は、生化学的性状を指標とする菌種同定している施設においては、遭遇し得る事例である。1 次鑑別による推定菌種誤認は、誤同定誘発する一因となった事例を持って注意を喚起する。菌種同定において同定プロセスの効率化と同定精度の向上には、検査技師のスキルアップと総合的に検査結果を判断する論理的思考が必要であると考ええる。

【連絡先】0485-593-1212 （内線 6153）